一　般　演　題

1. ^{99m}Tc-HSA SPECTにて放射線治療効果を経過観察した肺癌脳転移の1例

土田　龍郎　友井　正弘　山本　和高
石井　靖　（福井医大・放）

症例は60歳，男性．近医にて，肺癌および脳転移を指摘され，放射線治療が施行された．治療による腫瘍血液量の変化を観察するため，治療前，治療終了直後，4週間後にHSA SPECTとT2* dynamic MRIを行った．SPECTは，腫瘍と対側のカウント比を，MRIはdynamic dataから得られたblood volume mapを用いて治療効果の推移を観察した．いずれにおいても，造影MRI T1強調像で見られる治療による腫瘍径の縮小を血液量の減少として捉えることができた．dynamic MRIに関しては，その有用性は文献的に報告されており，HSA SPECTについても同様の評価が可能であると考えられた．

2. 母斑症 (Phakomatoses) の3例 ——脳血流SPECTによる評価——

渡辺　直人　清水　正司　呉　翼偉
富澤　岳人　森尻　実　野口　京
蔭山　昌成　瀬戸　光
（富山医薬大・放）
辻　志郎　（金沢大・保健）

母斑症の3例につき，脳血流SPECTによる評価を試みた．結節性硬化症女児．CTで典型的な脳室周囲の石灰化を認めた．MRIでは，さらに，両側後頭葉，右前頭葉に白質病変を認めた．SPECTでは左後頭葉に血流欠損を認めた．神経線維腫症1型女児．MRIでは，左基底核に過誤腫の存在が疑われた．SPECTでは，同部の血流低下を認めた．Sturge-Weber症候群女児．CTでは左側に広範な典型的な石灰化と脳萎縮を認めた．SPECTでは，左側の半球に広範な血流低下を認めた．母斑症における脳血流SPECTによる評価の報告は少ないと考えられる．われわれは，稀少な3例につき脳血流SPECTについて報告した．

3. 高血流領域を認めたSturge Weber症候群の1例 (第2)——^{99m}Tc-ECD後期像の意義——

松村　要　中島　弘道　竹田　寛
中川　毅　（三重大・放）
青木　茂　平野　忠則
（松阪中央病院・放）
渡辺　佳夫　（同・神内）

症例は73歳女性，Sturge Weber症候群として経過観察されていた．平成8年1月22日，てんかん発作あり，入院した．2月6日(発作2週間後)の^{99m}Tc-ECD脳血流SPECT(投与15分後)にて左側頭葉，頭頂葉に広範な高集積を認め，局所的血流増加を示した．投与3時間後の後期像を撮像したところ，左頭頂葉は高集積であったが，左側頭葉に集積低下を認め，洗い出しの亢進を示した．後期像での集積低下部位にはT2強調MR画像にて高信号を認め，造影CTにて軽度の造影を認めた．ECD後期像を撮像することにより，脳の組織損傷の程度を評価できる可能性が示唆された．

4. SPECTで診断したいわゆるmisery perfusionにEC/ICバイパス術を施行した内頸動脈閉塞症の1例——9年間の経過観察とreverse Diamox enhancementの出現について——

外山　宏　竹下　元　柴田　香織
江尻　和隆　竹内　昭　仙田　宏平
片田　和廣　古賀　佑彦（藤田保衛大・放）
庄田　基　加藤　庸子　佐野　公俊
神野　哲夫　（同・脳外）
石山　憲雄　（藤本病院）

TIA発作を繰り返し，SPECT上の脳血流量低下，脳血液量上昇からmisery perfusionと診断した内頸動脈閉塞症にバイパス術を施行し，長期間，SPECT上の改善を認め，虚血発作の予防にも有用であった．

Presented by Medical*Online